中一国語
坊っちゃん　第一回

講師：羽場 雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・坊っちゃん

◆ 基本情報

・著者…夏目漱石（なつめそうせき）（1867～1916）

東京大学英文学科卒業後、教師を経てイギリスに留学。

「吾輩（わがはい）は猫（ねこ）である」「こころ」などで有名。

・時代…明治時代

1906年（明治39年）に「ホトトギス」という雑誌で発表。

◆登場人物

・〈俺（坊ちゃん）〉…主人公。親譲りの無鉄砲。

・〈兄〉…主人公と仲が悪く、よくけんかをしていた。

・父

・母

・〈清〉…主人公の家の奉公人。主人公を大変かわいがった。

※奉公人＝他人の家に雇われて、家事や家業に従事する者。召使い。

◆場面

・第一場面…子供時代の無鉄砲な「俺」の悪行。

・第二場面…母が死んでからの「俺」と父、兄と、清の関係。

・第三場面…「俺」と清の関係。

・第四場面…父の死によって家を売る。一家離散。

・第五場面…兄に金をもらい、物理学校で学ぶ。

・第六場面…遠い四国の中学への赴任が決まり、清と別れる。

◆　小説読解をするときは

・登場人物を把握（はあく）しよう。

・それぞれの人物の「性格」と「心情（気持ち）」を読み取ろう。

※ちなみに心情は、ほぼ必ず変化する。

親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、①学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事はできまい、弱虫やあい。とはやしたからである。人におぶさって帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか、と言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

（中略）

おやじは、ちっとも俺をかわいがってくれなかった。母は、兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やけに色が白くって、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならないと、おやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおりの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二、三日前、台所で宙返りをして、へっついの角であばら骨を打って大いに痛かった。母がたいそう怒って、お前のような者の顔は見たくないと言うから、親類へ泊まりに行っていた。すると、とうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかったと思って帰って来た。そうしたら例の兄が、俺を親不孝だ、俺のために、おっかさんが早く死んだんだと言った。くやしかったから、兄の横っつらを張って大変叱られた。

【練習問題】

「俺」が、――①のような行動をとったのはなぜですか。文章中の言葉を使って具体的に書きなさい。

同級生の一人が弱虫やあいとバカにしてきたのが面白くなかったから。

←負けず嫌(ぎら)いで短気。

後先考えずに行動する人物であることが分かる。

＝ 無 鉄 砲

1 親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事はできまい。弱虫やあい。とはやしたからである。人におぶさって帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか、と言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

（中略）

2 おやじは、ちっとも俺をかわいがってくれなかった。母は、兄ばかりひいきにしていた。①この兄は、やけに色が白くって、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならないと、おやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおりの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

（中略）

3 母が死んでからは、親父と兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば、きさまはだめだだめだと口癖のように言っていた。何がだめなんだか今にわからない。妙なおやじがあったもんだ。兄は、実業家になるとか言って、しきりに英語を勉強していた。元来、はっきりしない性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしていた。ある時将棋を指したら、ひきょうな待ち駒をして、人が困るとうれしそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手にあった飛車を眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて、少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

4

その時はもうしかたがないと観念して、先方の言う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という女が、泣きながらおやじに謝って、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじを怖いとは思わなかった。かえって、この清という女に気の毒であった。この女は、もと由緒のある者だったそうだが、瓦解のときに零落して、ついぼうこう奉公までするようになったのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんが、どういう因縁か、俺を非常にかわいがってくれた。不思議なものである。〈母も死ぬ三日前にあいそをつかした——おやじも年じゅうもてあましている——町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする——この俺〉を、②むやみに珍重してくれた。俺はとうてい人に好かれるたちでないと諦めていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はときどき、台所で人のいないときに「あなたは、まっすぐでよいご気性だ。」と褒めることがときどきあった。しかし、俺には清の言う意味がわからなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思った。清がこんなことを言うたびに、俺はお世辞は嫌いだと答えるのが常であった。するとばあさんは、それだからいいご気性ですと言っては、うれしそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造して誇ってるように見える。少々気味が悪かった。

（「坊っちゃん」）

※句読点や符号も一字と数えます。

【第一問】

――①「この兄」の性格が書かれている部分として最も適した一文を 2 ～ 3 から探し、初めの十字を書き抜(ぬ)きなさい。

元来、はっきりしない

【第二問】

〈母も死ぬ…―この俺〉に関して、周りの人からそのように扱われることに対して「俺」は どう思っていたか。二十～三十五字程度で書きなさい。

・自分はとうてい人に好かれる人ではないと諦めていた。
・他人から木の端のように取り扱われる事ことはなんとも

【第三問】

――②とありますが、「清」の「俺」に対する同じような態度が書かれている部分を文章中から十二字で探し、書き抜きなさい。

非	常	に	か	わ	い	が	っ	て	く	れ	た

【第四問】

「俺」の性格を説明したものとして、次の各選択肢(せんたくし)は適切か。適切なら○、不適切なら×を書きなさい。

ア、負けず嫌いで、まっすぐな人物。

イ、神経質で、人からの評価を気に病(や)む人物。

ウ、短気で、後先考えずに行動する人物。

エ、ばか正直で、融通(ゆうずう)のきかないところがある。

オ、プライドが高く、自分の欠点を決して認めない。

カ、非難されても疎(うと)まれても、落胆(らくたん)せずにあっさりしている。

ア→○　イ→×　ウ→○
エ→○　オ→×　カ→○